

幼児言語の発達研究

On the Language Development of an Infant

前田 桂子^{*)}、玉井百合子^{**)}、濱部真沙美^{**)}

Keiko Maeda, Yuriko Tamai, Masami Hamabe

要旨：ある幼児を対象に、言語習得について観察研究を行った。1歳9ヶ月時点から3歳2ヶ月時点の約1年半に見られた動詞、形容詞に注目して、それぞれ誤用分析を行ったところ、幼児なりに文法的ルールを見出し、それに適合しないものについて誤用が現われる様子がうかがえた。また、助動詞においては、習得した順に並べてみると、まず単純な事実を描写する形式を習得し、その後、時間的・空間的な把握を経てさらに対人的な使い分けへと言語表現が拡大していった様子が観察された。

Key Words：幼児言語 動詞 形容詞 助動詞 発達

はじめに

乳幼児がことばを獲得するプロセスはすでに多くの先学によって研究されており、子どもの認知面での発達を知る上で興味深い。しかしどの研究も観察対象を1、2名としており、本研究においてもその事情は同様である。従って一人の子どもの観察では子ども全体の発達過程を論じることはできないかもしれないが、他の研究と統合することによってより確かなものとして捉えられると考える。本研究が子どものことばの発達研究の1データとして、貢献できることを望む。

さて、すでに宇部フロンティア大学附属地域研究所年報6号において「乳幼児の言語習得」と題して、一人の子どもが発した言語を生後～1歳10ヶ月まで観察した結果を発表した。本稿はその続編である。前回は発音面の発達や名詞の獲得に焦点を当てたが、その後A児の成長につれて物事の認知が発達し、動詞や助動詞などの文法的な習得をして、複雑な言語表現ができるようになってきた。今回は、特に用言に焦点をあてた調査結果を報告し、若干の考察を加える。

1. 調査方法および対象

対象幼児	2歳女兒、兄弟なし。本研究ではA児と称する。本研究の代表者前田の長女である。
観察時期	1歳9ヶ月～2歳9ヶ月の13ヶ月。また3歳2ヶ月時点で一部、追跡調査を行った。以下、月齢表記は1歳9ヶ月の場合1;9と略す。
生活環境	平日の日中は自宅で祖母と二人。近隣に同年代の幼児が約7～8名おり、ときどき一緒に遊ぶ。夜と週末は両親と過ごす。言語環境としてはNHKの幼児向け番組や幼児教材DVDを好んで視聴する。
記録方法	日常生活の中での筆録およびビデオ録画による。筆録は2;6まで毎日行ったものを使用した。録画はほぼ毎週行い、全期間にわたるが量にバラつきがある。2;6までは週1時間程度の母親による単独撮影で、録画時間が短い日もあったが、A児の言語量が増加した2;7以降は、本稿執筆3名による協力体制のもとに毎週2時間程度、積極的にA児に話しかけなが

^{*)} 宇部フロンティア大学人間社会学部児童発達学科准教授

^{**)} 宇部フロンティア大学人間社会学部児童発達学科4年生

ら撮影した。録画したビデオは表計算ソフトによりデータ化し、発話の意味や状況、品詞名などを入力して使用した。

2. 幼児の言語習得と時期について

大久保 1967 に、大久保氏の長女の観察に基づいた詳細な報告がなされている。その中の A 児の年齢に該当する 2 歳以降の記述を見ると、多語文・従属文が発生し、格助詞などのついた整った文が多くなったこと、形容詞・形容動詞の修飾的な使い方ができるようになったことが記されている。その後 2 歳半ころには「どうして」を繰り返すようになり、さらに、2 歳 11 ヶ月以降は接続詞を交えた文章が構成できるようになったという。また、シュテルン¹⁾の研究を引用して、2 歳から 3 歳にわたる時期は、動詞の活用や感嘆文、疑問文など文の種類も増えることが述べられている。これらをまとめると、概ね表 1 のようになる。このことから本研究では、A 児の当該年齢における言語発達のポイントとして、動詞と形容詞など用言に絞って観察することにした。

3. 動詞の習得状況

大久保 1967 において、幼児が動詞を習得する際、活用形による遅速が見られたという報告があるので、A 児の場合と比較してみる。大久保氏による

と、獲得の初期の頃は連体形が一番早く、3 歳までには使用動詞活用形の 59% を占めるという。次が終止形の 25%、未然形 13%、命令形 2%、連体形は 2 歳からで 2%、仮定形は 2 歳 8 カ月以降、2 例のみという結果であった。では、A 児の場合はどうか。表 2 に月齢別に現れた各活用形の数を示した。数字は延べ語数である。

動詞は習得し始めるころには大久保氏の調査と同様、連用形の出現が早い。2;9 までの調査で全体の 59.1% を示した。終止形は 22%、未然形が 17.7%、命令形 0.7% と続き、仮定形はごくわずかという数値も、大久保氏と驚くほど近似していた。使用された連用形の内訳は、2;7 以降にサガシテミルやトンデイクなどの複合動詞の例が出てくるものの、調査期間を通して、アッタ、ツイタなどの過去形、ミテ、オイデ、ノミタイなどの要求表現がその大半であった。目の前で起こった事態を描写したり、周囲の人に要求を伝えるという発話が多いため、連用形の使用が多くなると考えられる。連用形より遅れて出てくる終止形も、キク、ノム、ミルなど、いずれも「聞きたい」「飲みたい」「見たい」という願望を表す時に使われている。また、1;9 頃から見られる未然形は、デナイ、イカナイなどの否定形と、ミヨウ、カエロウなどの勧誘形が見られた。以上の事から、習得初期の動詞は欲求の伝達表現が中心である様子が窺えた。

表 1 大久保愛『幼児言語の発達』より（一部抜粋し、私にまとめ直した）

人名 年齢	阪本一郎	シュテルン	大久保愛
2 歳 2 歳半	羅列期 語を羅列した多語文を使う時期。	第三期 語の変化活用のできる時期 動詞の活用、名詞の格変化、形容詞の比較級構成。文の種類 感嘆文、陳述文、疑問文	多語文・従属文の発生 (2:0 ~ 2:5)
2 歳半 3 歳	模倣期 ひとのことばのまねがさかんな時期	第四期 羅列的単文がなくなり、いろんな形式の従属文が発達する。接続詞や助詞が入ってきて、文章として整った形になる。 「いつ」「なぜ」など、時間あるいは理由について質問する第二質問期が出てくる。合成語、転成語など幼児みずからがつくる。	第二質問期 (2:6 ~ 2:10) 文章構成期 (2:11 ~ 3:11)

¹⁾ シュテルン Stern, W. 1871-1938 輻輳説を提唱して、発達は遺伝的要因と環境的要因の加算的な影響によるものとした。

表2 動詞活用形の習得状況 (のべ語数)

	~1;8	~1;11	~2;2	~2;6	~2;9	計	%
未然		26	10	12	86	134	17.7
連用	13	87	29	20	299	448	59.1
終止 連体		22	27	18	100	167	22.0
假定			0	0	2	2	0
命令		3	3	0	1	7	0.7
計	13	138	69	50	488	758	10.0

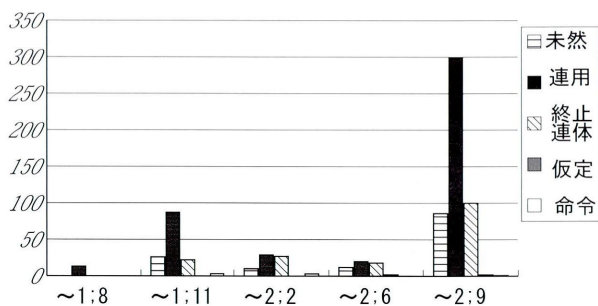


図1 動詞活用形の習得状況

3-1. 動詞の誤用分析

幼児はことばを習得する際、様々な誤用をするが、伊藤克敏 1990 は誤用を「子どもの習得過程の独自性、創造性の証左」であるとする。子どもの言い間違いは、子どもが自分なりに規則性を見いだした後、それに当てはまらなかった場合に起こるといわれる。誤用には音韻的、語彙的、文法的などさまざまなパターンがあるが、ここでは動詞の活用型や自動詞、他動詞の混乱など、文法面に焦点を当てて考察する。

まず、表3に本研究における全体の誤用率を示す。数字は述べ語数である。観察時間に偏りがあるため2;1~2;5の時期は極端に少ないものの、初期の1;6から2;2には見られなかった誤用が2;3頃から現れ出し2;9時点までわずかながら継続的に見られるという全体の流れはつかむことができよう。

では、以下に誤用の例をパターン別に挙げる。

(活用形の誤用)

この例として、以下の者が挙げられる。

- 2010.3.7 (2;6) 母親「外れないよ」
A 児「コレ、ハズル？」
- 2010.3.21 (2;6) 母親「(ジグソーパズルをしていて)ここは合わないよ」
A 児「アワル」
- 2010.3.22 (2;6) 母親「蓋が開かないね」
A 児「アカルヨ」
- 2010.2.27 (2;6) 母親「碧ちゃん、知らないの？」
A 児「シラル」
- 2010.6.7 (2;9) 母親「お天気よくないね」
A 児「ヨクルヨ」

これらの例は、母親が否定形の質問をした際に肯定しようとして、ハズル(外す)、アワル(合う)、アカル(開く)、シラル(知っている)という誤用

表3 A児の動詞誤用率 (1;6-2;9)

	1;6	1;7	1;8	1;9	2;0	2;1	2;2	2;3	2;4	2;5	2;6	2;7	2;8	2;9
正用数	1	3	9	49	51	3	16	4	11	4	28	61	136	292
誤用数	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	5	10	6	12
誤用率	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	20.0%	8.3%	0.0%	15.2%	14.1%	4.2%	3.9%

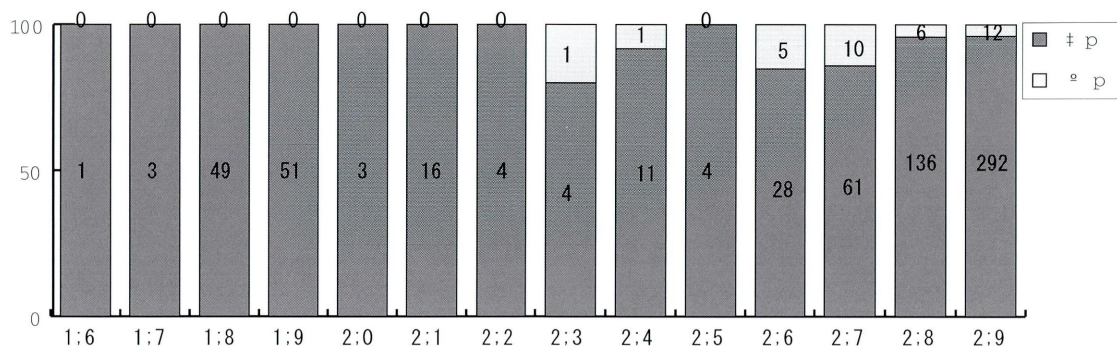


図2 動詞誤用率の推移 (1;6 - 2;9)

が現われたものである。概ね、ナイの部分をもルに置き換えるという操作で作られた活用形であろうと思われる。A児は「食べる」「見える」などルで終わる動詞を早く習得したが、その否定形との対立「食べル--食べナイ」「見エル-見エナイ」「居ル---居ナイ」などから類推して生まれたのではないか。無理にル終止形を作ろうとして間違っただけ、いわゆるハイパーコレクション（誤れる回帰現象）ではないかと考えられる。また、終止形から逆に否定形が生まれた例としてスラナイ（しない）があったが、これも「ル-ナイ」の対立と考えることで説明がつく。

2009.12.1 (2;3) 母親「お着替えする？」

A児「スラナイ」

(ヴォイスの誤用)

以下は、受身、使役の表現における誤用である。

2010.4.21 (2;7) ヒヨコラル(ひよこを取られる)

2010.4.21 (2;7) ウゴカセテヨ (動かして)

ヒヨコラルはおやつの饅頭について述べたもので、おそらく「取られる」と言おうとしたのではないかと考えられるが、状況に脈絡がないため、定かではない。また、ウゴカセテヨは、自分が座った椅子について、自分では動かさないでテーブルの方に寄せてほしいという意味で言ったものである。「動かしてよ」というのが正しい形であろう。

(自動詞と他動詞の混同)

自動詞他動詞の混乱も多く見られた。

2010.3.22 (2;6) トドケタ (届いた)

2010.4.21 (2;7) トドケル トドケタ
トドケナイ (届かない)

2010.5.19 (2;7) ハズルノ (はずす)

2010.6.9 (2;9) ミセテ、アンヨ (足を見て)

2010.6.9 (2;9) ミセテ
(豆を見せながら「見て」)

2010.4.21 (2;7) コレ、キテヨ
(このエプロンを着せて)

2010.5.19 (2;8) ホシニナローカナー
(星にしようかな)

アンヨを「ミセテ」は自分の足を見てほしいという意味であり、「コレ、キテヨ」はエプロンを自分に着けてほしいという意味である。最後の例「ナローカー」は「する」と「なる」の混乱である。どの形にするか、選ぶ場面で発したことばで、明ら

かに「星にしよう」という意思表示の発言である。

以上から、自動詞を他動詞に間違える場合もある一方でその逆もあり、自他の混乱している様子がわかった。

(その他の文法的誤用例)

2010.6.2 (2;8) カカラナイ
(書くことができない)

この例は、紙にペンで書こうとしてインクがつかなかった際に発した言葉で、「書くことができない」と言おうとしたものである。五段動詞「書く」は本来、未然形+レナイであるが、「食べられない」「起きられない」のような一段動詞+ラレナイをまねて書カラレナイと言おうとしたものの、不完全形となったと解釈できる。

2010.3.7 (2;6) アブナカツチャツ
(危なかった)

これは、車の中でチャイルドシートのベルトを外して降りようとした時に、はずみで転びそうになって思わず発した言葉である。一般的には「危なかった」という場面であるが、A児なりの強調表現で、「落としちゃった」「失敗しちゃった」などのように、思わぬ事態であることからチャツタを使ったようである。

2010.5.26 (2;8) ママトイショニ スベバイ
インダ (ママと一緒に滑れば
いいんだ)

2010.5.19 (2;8) アンマリノツテナカツ
(観覧車に乗った？と尋ねられて「乗ったことがない」)

スベレバをスベバと誤ったもので、活用形が未習得な段階での舌足らずな誤りであろう。また、「ノツテナカツ」は、「したことがない」という経験を表す表現に別の形式を使って誤った例である。

3-2. 追跡調査

以上の調査から約4カ月経過した時点で、その後のA児の習得状況を知るべく、追跡調査を実施した。

誤用のパターンについては、上記のようにいくつか分類したが、中でも「活用形の誤用」「自他の混乱」についてその後の習得状況を確認した。実施日はA児が3歳2ヶ月時点の11月2日である。調査方法は、対象語を引き出すような問いかけをするクイズ形式によるものである。自然発話データのみ

られた活用形の誤用と主語の混乱による誤用を引き出すような問いかけをする対話形式の調査である。

3-2-1. A児の活用形の誤用について

活用形の誤用については、A児の以前の誤用例から、次の6語に絞った。

- ・アワル (合う) ・トドケタ (届いた)
- ・シラル (知っている)・ハズル (外す)
- ・スラナイ (しない) ・カカラナイ (書けない)

この調査では、筆者らが事前に設定した内容をA児に質問し、答えを引き出した。例えば「合う」の誤用形「合ワル」を引き出すためには「合わないでしょ？」と問いかけ、「しない」の誤用形「スラナイ」と引き出すためには「するでしょ？」と言って逆の意味の質問をした。

以下はその時の会話である。A児の発話はカタカナで示す。誤用の例には*を付してある。

- (観察者の発話、および状況) (A児)
- ・「これ合わないよ」 → 「アウヨ」
 - ・「Aちゃん、合う？合わせる？どっち？」
 → * 「アワルヨ」
 - ・「届けた、届いたどっち？」
 → 「トドイタ」
 - ・机の上のものを取ろうとして
 (自発的発話)「トドカナカッタダヨー」
 - ・「知らないでしょ」 → 「ハズシタノ」
 - ・「ペンのふたがどうなった？」
 → 「ハズレタ」
 - ・ペンを握りしめて
 (自発的発話)「カク」
 - ・ホワイトボードに書く様子を見て (自発的発話)
 「ココニカキテイクンダ」
 - ・「Aちゃんその (インクが出ない) ペン
 書ける？」 → 「カケル」
 - ・シャーペンの芯を出さずに書こうとして
 (自発的発話)「カケナイ」

また、その調査結果を表4にまとめると、以下のようになる。カタカナはA児のことばである。

表4 A児の活用形の正誤確認表

2;7 - 2;9に産出した 誤用形	正誤	11月2日時点の発話
アワル (合う)	○	アウ
	○	アッタ
	×	アワル
トドケタ (届く)	○	トドイタ
	○	トドカナカッタ
シラル (知っている)	○	シッテル
ハズル (外す)	○	ハズレタ
スラナイ (しない)	○	シナイ
カカラナイ (書けない)	○	カケタ
	○	カケナイ

この時点で誤用形としては「アワル」のみ観察されたが、他は全て正しい形を習得していることが明らかとなった。

調査から、A児が2歳7ヶ月から2歳9ヶ月の時期に見られた活用形の誤用が3歳2ヶ月時点ではほとんど消失していることから一過性のものだったことが分かった。新しく習得する動詞は覚えたばかりの時点では大人の真似をして正しく繰り返すが、自分で使っているうちに誤用例が現れ、また、次第に周囲の大人の言い方と同じように修正していく様子が窺えた。ただし、「合う-アワル」については、A児の中で正用、誤用とも存在しているようで「合う？」「合わせる？」と改めて問いかけてみると誤用形が現れるなどまだ混乱した様子が見られた。

3-2-2. 自動詞、他動詞の混乱について

次に、自動詞他動詞の混乱の様子を調査した。調査では「〇〇が〇〇を」の後半を答えさせる質問をした。たとえば「ボールがコップに…?」「ボールをコップに…?」などという質問をし、動作もあわせて行ったところ、様々な動詞が採集できた。表5に、観察された用例を全て挙げる。なお誤用の例には*を付してある。そのうち自動詞と他動詞の両形が対照できる単語は以下の通りである。

- あく-あける 落ちる-落とす 壊れる-壊す
- 付く-付ける 取る-取れる 外れる-外す
- 見える-見せる

なお、自動詞のみが観察され、誤用した例として、以下のものがある。

落書きを消した後に、「Aちゃんが…?」と尋ねた。
→ A児「キエル」

表5 自動詞と他動詞の使用例

ことば	自動詞・ 他動詞	意味	状況
《開く－開ける》			
アイタ	自	開いた	ストローを開けているときにストローが…?と聞くと
アナガアイテルヤツ	自	穴が開いてるやつ	ドーナツを見て
ナンカアナガアイテナイ	自	なんか穴が開いてない	自分の食べているワッフルを見て
アケテ	他	開けて	お菓子の袋を開けて欲しくて
アケテ	他	開けて	ペンのキャップを開けてほしくて
アケテ	他	開けて	扉を開けてほしくて
*ドウヤツテアクノ?	他	どうやって開けるの?	扉の開け方が分からなくて
アケテ	他	開けて	かえるの袋を開けてほしくて
ナニアケル	他	何開ける	これ開けていいの?と聞くと
《落ちる－落とす》			
ア－オチタ	自	あー、落ちた	磁石で貼っていた紙が落ちるのを見て
オチタ	自	落ちた	赤いのが…?と聞くと
ナニガオチテル	自	何が落ちる?	あおいちゃん落ちちゃうよと言うと
ミタラオチチャウノ	自	見たら落ちちゃうの	あおいちゃんが(落ちるよ)と言うと
オチテル	自	落ちてる	あおいちゃんにあげたのどうなってる?と聞かれて
*オチタ	自	落ちた	落ちた物を指して、あおいちゃんが、下に…と聞くと
オトス	他	落とす	ママが…?と言いながらボールを落とすと
モウイッカイオトシテ	他	もう一回落として	ボールを落としてほしくて
《取れる－取る》			
トツタンジャナイ、 トレタ	他 自	取ったんじゃない、 取れた	バットの足取ったの?と聞くと
《壊れる－壊す》			
コワシテナイ	他	壊してない	あおいちゃん、壊した?と聞かれて
コワスノダー	他	壊すのだー	あおいちゃんがどうするの?と聞くと
*コワレナイ	自	壊れない	あおいちゃんが、時計を…?と聞くと
《付く－付ける》			
ツイタ、ツイタヨ	自	ついた、ついたよ	磁石をホワイトボードにくっつけて
ツイタ	自	ついた	磁石をつけながら
ツイタ	自	ついた	磁石をボードにくっつけて
ツイタ	自	ついた	磁石をくっつけて
*ツケル	他	(磁石が)つける	磁石が…?と聞くと
《外れる－外す》			
ハズシタノ	他	外したの	ママがどうしたの?と聞くと
ハズレタ	自	外れた	ペンのふたがどうなった?と聞くと
《見える－見せる》			
ミエルネー	自	見えるねー	携帯の照明が暗くなっていて、どうなってる?と聞かれ
ミエナカッタ	自	見えなかった	手の中の磁石が見えなくて
ミシテ	他	見せて	磁石を見せてほしくて

※網掛けは誤用を表す

次ページの表6は、この追跡調査でA児が使用した動詞の一覧である。それぞれ自動詞・他動詞の別を記し、使用回数を示した。また表7は自動詞・他動詞の区別を正しくできたかについてまとめた表である。「外れる－外す」「見える－見せる」については、主語の混乱が起こらずに正しく使用できているようである。他の単語については、主語の混乱

がみられた。×が付された動詞においてもつねに誤用したのではなく、むしろ正しく使用出来た場合の方が多かった。

上野田鶴子ほかによる「従来動詞文の理解の発達に関する実験的研究」(1979, 日本音声研究会)によると、自動詞と他動詞の区別(主語の混乱)は小学校高学年になってからはっきりと使い分けが出

表6 11月2日 A児の使用動詞一覧

自	あう	1	自	おわる	1	他	たべる	3	自	はじまる	1
自	あく	3	自	かえる	2	他	つくる	1	他	ひっぱる	1
他	あける	6	他	かく	2	他	つまむ	1	自	まつ	1
他	あらう	2	可能	かける	2	自	でる	1	自	みえる	2
他	いう	1	他	かぶる	4	自	とどく	2	他	みる	1
自	いく	1	自	きえる	6	他	とる	2	他	みせる	1
自	うごく	6	自	くつつく	4	自	とれる	1	他	みつける	2
自	おこる	1	他	こわす	2	自	なく	2	他	もつ	1
他	おす	1	自	こわれる	1	他	ぬぐ	1	自	やぶれる	1
自	おちる	6	他	しる	2	自	はいる	1	自	よごれる	1
他	おとす	3	自	つく	7	他	はずす	1			
他	おりる	1	他	つける	2	自	はずれる	1			

※網掛けの箇所は自動詞と他動詞が両方ともみられたものである。

表7 自動詞と他動詞

自動詞－他動詞	正誤
開く－開ける	×
落ちる－落とす	×
壊れる－壊す	×
倒れる－倒す	×
付く－付ける	×
外れる－外す	○
見える－見せる	○

来るようになるという指摘もあるので、幼児であるA児にはまだまだ難しいのであろう²⁾。

以上は誤用について述べたが、誤用ではないが、この追調査でA児が状況をはっきり捉え自動詞・他動詞の区別を使い分けている例も見られた。

バッタを捕まえる話をしていて、筆者らがA児に「バッタの足取ったの？」と尋ねるとA児は「トツタンジャンナイ、オトシタラトレタ」と答えた。意識的に取ったものか、自然に取れたものか明確に区別していることがうかがえた。

今回の追跡調査では動詞使用として99例が観察された。そのうち主語の混乱による誤用は、全体の4%で、動詞の使い方の誤用も含めると7%であった。対象とした語は、2;9時点に比べるとかなり正確な形を習得できていることがこの追跡調査で明らかになった。

4. 形容詞活用の誤用分析

次に、形容詞の誤用について述べる。形容詞の誤

用については横山(1990)に詳しい。それによると、幼児は一歳後半頃から形容詞を使い始めるが、その後1～3ヶ月遅れて名詞を修飾する形容詞の誤用が現れだし、正用と共存して使われるという。誤用の出現頻度が高いのは2;3～2;4頃までであるが、種類が限定されている。その後誤用の出現頻度は低くなり自己修正発話が現れる。

A児について2;7～2;9に当たる4月21日～6月16日までの期間に自然発話による観察をした。以下は観察された結果である。異なり語数で39語、延べ語数131語が確認された。対象とした中にはいわゆる形容動詞も含むが形容詞として一括して扱った。特に区別を必要とする場合はイ形容詞、ナ形容詞という用語を使用する。

(異なり語一覧)

青い 熱い 危ない いい 痛い
嫌だ うまい おいしい 大きい おしまいだ
遅い 同じだ 面白い 重たい かつこいい
かゆい かわいい かわいそうだ 嫌いだ
苦しい 怖い 寒い 残念だ 邪魔だ
上手だ 好きだ すご ちっ 無理だ
めんどくさい 優しい

そのうち誤用は次のナ形容詞5語、延べ語数で6例が見られた。

邪魔だ 好きだ 嫌いだ 食べすぎだ
かわいそうだ

観察期間に形容詞は131例観察されたので、延べ語数で計算すると、誤用は全体の4.6%ということに

²⁾ 大久保1984に、研究発表の内容として紹介されている。

表8 形容詞の出現数と誤用数 * () は異なり語数

出現語数	131 (39)
誤用数	6 (5)

なる。

以下、誤用例を中心に見ていくことにする。

4-1. 形容詞の誤用分析

表9と図3は、1;8～2;9までの、A児の自然発話中の形容詞の出現語数を月齢ごとにまとめたものである。出現語を正用と誤用に分けて、月齢ごとの誤用率も算出した。2;1から2;4の数字が極端に少ないのは観察時間にバラつきがあるためである。

形容詞を使い始めたのは1;1で、

- 2008.10.11 (1;1) イヤダー (嫌だ)
- 2008.10.10 (1;1) ナンナーイ (なくなった)

が最初であるが、それ以降2;4まで、音韻的な問題を除いて言い間違いはない。2;5になるとナ形容詞に、

- 2010.2.18 (2;5) *キレクナイ (きれいじゃない)
- 2010.2.27 (2;6) *キラクナイ (嫌いじゃない)
- 2010.3.14 (2;6) *ダメクナイ (ダメじゃない)

などの誤用が始める。クナイはイ形容詞の否定形であるが、この頃ナ形容詞もすべて区別なく「～クナイ」となっていた。ジャナイが名詞につく形としては2;7以降、「オシゴトジャナイ?」「オワリジャナイ」「ソラチャンジャナイ」など名詞接続の形として習得した。

- 2010.4.12 (2;7) ママ、キョウハオシゴトジャナイ?
(今日はお仕事じゃないの?)
- 2010.5.12 (2;8) オワリジャナイ
(終わりじゃない。)
- 2010.6.2 (2;9) コレ、バニーチャンジャナイ?
(バニーちゃんじゃない?)
- 2010.6.16 (2;9) アオチャンジャナイカナ
(碧ちゃんじゃないかな)
- 2010.6.16 (2;9) エーソラチャンジャナイノニ
(曾来ちゃんじゃないのに)
- 2010.6.16 (2;9) ゴンベシャンノジャナイヨ
(権兵衛さんじゃないのに)

しかし、2;9時点でもナ形容詞+ジャナイはまだみられず、すべてクナイの形で表現している。

- 2010.6.2 (2;9) *タベスギクナイヨ
(食べすぎじゃない)
- 2010.5.26 (2;9) *スキクナイ
(好きじゃない)
- 2010.5.26 (2;9) *ヤッパリスキクナイ
(やっぱり好きじゃない)
- 2010.5.26 (2;9) *キラクナイ (嫌いじゃない)

表9 月齢別誤用率

※数字は延べ語数

	1;8	1;9	1;10	1;11	2;0	2;1	2;2	2;3	2;4	2;5	2;6	2;7	2;8	2;9	合計
正用	14	34	31	30	14	1	3	0	2	10	5	15	31	85	146
誤用	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3	1	1	4	12
合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	13	8	16	32	89	158
誤用率	0	0	0	0	0	0	0	0	0	30%	60%	7%	3%	5%	

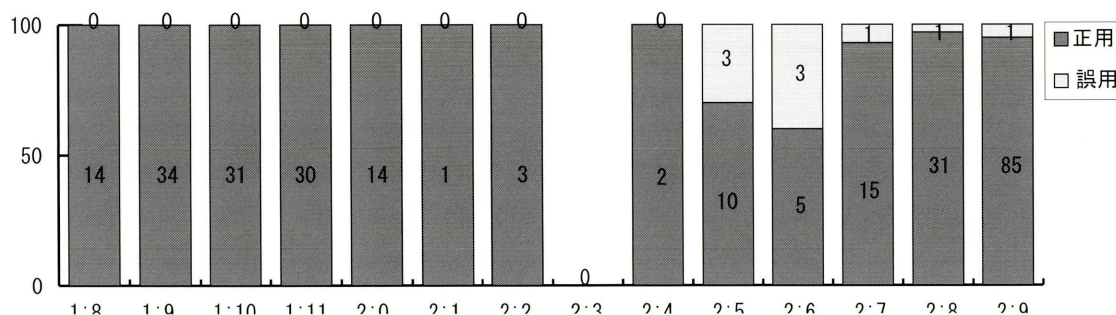


図3 A児の形容詞誤用率の推移 (延べ語数による)

イ形容詞にも誤用が見られ、「良い」を「ヨクル」と動詞型に活用させた例もあった。

2010.6.7 (2;9) *ヨクルヨ (お天気いいよ)

この例は、26 ページの動詞の項でも紹介したが、肯定形・否定形を「ハズレナイーハズル」といった対応で理解しているために起こった語形だと思われる。母親が「今日は、お天気良くないね。だからお外で遊べないよ」と言ったのに対して遊びたかった A 児が咄嗟に返したものである。否定形「良くない」のナイを捉えて、動詞に活用させるという混乱を起こしたものと考えられる。

その他、形容詞に関連した誤用としては、

2010.5.12 (2;8) *カワイソーノニ
(かわいそうなのに)

2010.11.2 (3;2) *キヨシロクナイ
(清志郎じゃない)

という例があった。カワイソーノニは母親に「人形とお風呂に入ろう」と言われて発したことばで、「かわいそうなのに」のナが抜けた形である。助詞ノニとの接続が未熟な例である。また、キヨシロクナイは、ミュージシャン忌野清志郎の画像を見て出てきた語である。この頃、データにはないが、「キモチロクナイ」といった、気持ちいいと「おもしろい」を混交したような語を A 児が発したという記録があり、音の似た「清志郎」と混乱したのかもしれない。形容詞でも名詞でも、言葉の後ろに「〜クナイ」をつければ否定形になると解釈していると思われる。

4-2. 追跡調査

上記の誤用がどのくらい続くのかを知るために、自然発話の観察から約 4 ヶ月経過した頃に追跡調査を行った。ここでも動詞の場合と同様に A 児に積極的に働きかけて答えさせる形をとった。観察対象となる言葉は、過去、A 児にクナイの誤用が確認されたものから選んだ。そして普段から A 児がよく使うかどうかとも考慮し、以下の 7 つを対象とした。

- ・きれくない(きれいじゃない)
- ・きらくない(嫌いじゃない)
- ・食べすぎくない(食べすぎじゃない)
- ・好きくない(好きじゃない)
- ・無理くない(無理じゃない)
- ・大丈夫くない(大丈夫じゃない)
- ・ちがくない(ちがうんじゃない)

調査では、上記の言葉を引き出せるような逆の意味の問いかけをし、発話を記録した。表 10 はそのときの A 児の発話をまとめたものである。

約 2 時間の中で「好きくない」と「食べ過ぎくない」は、それぞれ別の表現で答えてしまい、どうしても引き出せなかったが、それ以外の言葉に関しては否定形が得られた。

表 10 からわかるように、「きれくない」以外の言葉は正しい形「〜じゃない」として使われていた。ただ、発した回数が 1 回のみだったので、普段は正しく使っていたものが偶然、誤用として使われたのか、「きれくない」という言葉のみまだ誤用が残る

表 10 形容詞の追跡調査結果

誤用	ことば	意味
*	キレイクナイケド、キレイキレイガツイテナイ	綺麗じゃないけど、きれいきれいが付いてない
*	キレクナカッタ	綺麗じゃなかった
	ダイヨウブジャナイ	大丈夫じゃない
	ムリジャナイ	無理じゃない
	キライジャナイ	嫌いじゃない
	キレイダネ	綺麗だね
	チョビットキレイダネ	ちょびっと綺麗だね
	キライダモン	きらいだもん
	ダイジョウブダヨ	大丈夫だよ

表 11 ナ形容詞の正用誤用集計 * () は異なり語数

正用	7 (4)
誤用	2 (1)

のかは確かではない。調査の中でなかなか言葉を引き出せないときに、「キラクナイ?」、「嫌いじゃない?」と言って正用と誤用をA児に示し、片方を選ばせたが、正用を答える方が圧倒的に多かった。

このことから、4か月前に見られたナ形容詞の否定形の誤用は減少し、修正されていることが分かった。

5. 助動詞の習得

次に、助動詞の使用について触れる。以下は、生後～2;9までに観察された助動詞およびそれに準ずる形式の一覧表である。各形式は品詞別ではなく更に細かい活用形毎に独立して項目を立てている。例えば、マシヨウはマスの未然形+ヨウであるが、幼児が活用を意識して使っているとは考えにくいので、それぞれ別に取り上げた。

表 12 助動詞

分類	文法的意味	形式		1:9	1:10	1:11	2:0	2:1	2:2	2:3	2:4	2:5	2:6	2:7	2:8	2:9
時制	過去	タ	1:6～	○	○	○	○			○		○	○	○	○	○
肯否	否定	ン・ナイ	1:9～	○	○				○	○		○	○	○	○	○
指定	指定	ダ			○	○	○	○	○				○	○	○	○
アスペクト	動作相	チャッタ	1:8～	○	○								○	○	○	○
	継続相	テイル							○				○			○
	継続相	テキタ											○			○
	動作相	チャッテル													○	
	継続相	テアルンダ													○	
	向遠	テイク													○	
敬讓	丁寧	マス					○									
	丁寧	デス									○		○		○	○
授受	授恵	テアゲル							○	○				○		○
	受惠	テクレル														○
対事的モダリティ	比況	ミタイダ							○	○				○	○	○
	様態	ソウダ								○						○
	希望	タイ											○	○		○
	判断推量	ノダロウ														○
	判断丁寧	ノデス														○
	試行	テミル														○
対人的モダリティ	勧誘	テゴラン											○			
	確認	ジャン												○	○	○
	譲歩	テイイ												○		○
	勧誘	マシヨウ													○	
	確認	デシヨウ													○	○
	確認	タワケ													○	
	譲歩	ナクテイイ													○	
	譲歩	バイインダ														○
ヴォイス	使役	サセル												○		
	受身	レル・ラレル												△		

出現形式の数

3 4 2 3 1 5 5 1 2 9 10 14 18

※各項目は、A児の出現の早い順

※△は誤用例しか見られなかった語

助動詞を使用したことばとしては、キッタが初例で、1;6 から現れ始めた。チャッタは 1;8 からで、オワッチャッタの形で使用され、否定形ナイはデナイ、ミエナイが 1;9 頃から現れた。

- 2009.2.25 (1;6) キッタ (消えた)
- 2009.4.26 (1;7) アッタ (見つけた)
- 2009.5.11 (1;8) オワッチャッタ
(テレビが終わっちゃった)
- 2009.6.16 (1;9) イラン (いらない)
- 2009.6.9 (1;9) ハイ>NNイネ (入らないね)

その後、断定のダ、マスが加わって、しばらく新しい助動詞は増えなかったが、2;2 頃からミタイダ、テイル、テアゲル、ソウダなどの表現が増え、どんどん新しい形式を習得していった。

- 2009.9.8 (2;2) ダッコスルダ (抱っこして)
- 2009.9.21 (2;2) コレ、アキマシユ?
(これ、開く?)
- 2009.10.24 (2;2) オジイチャンミタイネ
(おじいちゃんみたいだ)
- 2009.11.12 (2;2) ナイテイルヨ
(誰かが泣いてるよ)
- 2009.11.12 (2;2) キツテアゲル
(私がパンを切ってあげる)
- 2009.12.8(2;3) イタソウネ
(痛そうね)

さらに複合的なものが増え、2;8 以降、ナクテイイ、テアルンダ、レバイインダ、テクレル、テミルなどが現れる。

- 2010.4.28 (2;8) タベナクテイイ (食べたくない)
- 2010.5.19 (2;8) フウセンツテカイテアルンダ
(風船と書いてあるのだ)
- 2010.5.26 (2;9) ママトイッショニ*スベ~~ン~~バイインダ

- (ママと一緒に滑ればいいんだ)
- 2010.6.9 (2;9) コレダレガカッテクレタ?
(これは誰が買ってくれたの?)
- 2010.5.19 (2;8) サワツテミル (触ってみるね)
- 2010.5.12 (2;8) ナニツカマエテルンダロウネ
(何を捕まえてるんだらうね)
- 2010.6.2 (2;9) ナツテナインデス
(エンジンの音が鳴っていない)

以上の事から、A 児の成長とともに表現が次第に豊かになったことが窺えた。2;1 頃まではタ、ナイ、チャッタを習得し、見たことを瞬間的に過去、現在、否定の単純な枠でとらえ、ことばに置き換えるだけだったものが、2;2 以降、～テアゲルなどを身近な人との 1 対 1 の関係で使用し、授受表現を獲得し始めたことが分かった。また、この頃、時間進行を示すアスペクト表現テイルの使用からもわかるように、時間の捉え方も継続的な幅が出ている。そして～ミタイダや、オイシソウダの使用からは物事の様態を、他との比較で捉える空間的な広がりが出てきたことがわかる。2;6 以降は、～タイを使って、自らの願望を明確に相手に伝え、～テゴランでは、他者の行動に働きかけを行う手段を獲得したと言える。また、反復を表す～テキタも現れ、その後の2;7 には許可を求める～テイイ、ヴォイスの～サセルや～レル・ラレルの使用が見られた。同じころに見られた対人モダリティに分類されるジャンの獲得では、口語的表現の、微妙なニュアンスも理解しはじめたことが窺える。この 2;6 頃を境に急速にモダリティ表現を身につけていく様子が明らかとなった。テアルンダは表 12 では便宜上アスペクトに分類したがこれには中にノダがあることから、モダリティの意味も含まれている。

こうして見ていくと、以上のことは次のように図式化して捉えることができるのではないかと思う。

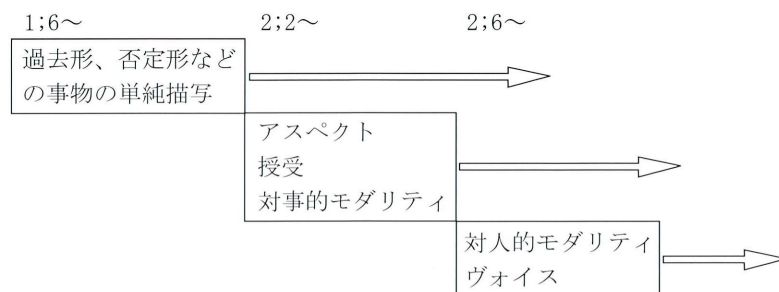


図4 A 児の獲得した助動詞の文法カテゴリー

つまり、A 児の助動詞の獲得は単純な事実の描写をするものから始まり、アスペクトとしての時間の把握やモダリティの中でも対事的なものをまず習得し、さらに対人的な表現に広がっていったということである。

おわりに

本稿は、児童発達学科の卒業研究として2名の学生の協力を得て進めたものである。昨年に引き続き、一人の幼児に注目して継続的な研究ができた。今回は、当該年齢に顕著な発達を示す動詞、形容詞、助動詞を選んだが、2歳半を過ぎた幼児の認知が発達するとともに言語表現を習得する様相について、その一端を明らかにすることができたのではないかと思う。今後はさらに、助詞や副詞についてもまとめていきたいと考えている。

なお、本稿における動詞の分析については主に玉井が担当し、形容詞の分析は濱部、助動詞は前田がそれぞれ担当した。

謝辞

2名の学生には、継続的研究にご協力をいただき、感謝します。毎週2時間及ぶデータは、今後も分析の資料として、大切に使用させていただきます。

参考文献

永野賢「幼児のことばの誤りについて」(『児童心理』

11 卷 8 号) 1957

西尾寅弥「幼児のことばの分析—読者からの寄稿を資料として—」(『言語生活』128号)1962

大久保愛『幼児言語の発達』東京堂出版 1967

ポーラ・メニューク『言語習得の原型』文化評論出版 1973

早川勝広「幼児におけることばの訂正」(広島文教科国文学 創刊号) 1973

高橋太郎『幼児語の形態論的分析』国立国語研究所 1975

大久保愛『幼児のことばとおとな』三省堂選書 1977

上野田鶴子ほか「従来動詞文の理解の発達に関する実験的研究」音声研究会発表資料 1979

大久保愛『幼児言語の研究』あゆみ出版 1984

横山正幸「幼児の連帯修飾発話における助詞『ノ』の誤用」

発達心理学研究 第1巻、第1号 1990

伊藤克敏『こどものことば 習得と創造』勁草書房 1990

月刊言語「特集 子どもたちの言語獲得」大修館書店 1992.4

前田富祺・前田紀代子『幼児語彙の統合的発達の研究』武蔵野書院 1996

小林春美・佐々木正人『子どもたちの言語獲得』大修館書店 1997

C.M. ショアー『言語発達ってみんな同じ?』学苑社 2009